

## 平成28年度 都倫研 第二回読書会のご案内

千葉県立東葛飾高等学校  
内久根直樹

次回の読書会（12月26日13:00～ 場所；首都大学東京 秋葉原キャンパス）はハンナ・アーレントの『人間の条件』となりました。孤独であることが一番辛いクリスマス明けの日に「なにもしていないときこそ最も活動的であり、独りだけでいるときこそ、最も独りでない」という言葉で締めくくられる本書を、ぜひみなさんと“アクティブ”に読み進められればと思います。ハロウィーンを乗り越えてみなさま、メリークリスマス。



### 『人間の条件』ちくま学芸文庫、1994年。

条件づけられた人間が環境に働きかける内発的な能力、すなわち「人間の条件」の最も基本的要素となる活動力は、《労働》《仕事》《活動》の三側面から考察することができよう。ところが《労働》の優位のもと、《仕事》《活動》が人間的意味を失った近代以降、現代世界の危機が用意されることになったのである。こうした「人間の条件」の変貌は、遠くギリシアのポリスに源を発する「公的領域」の喪失と、国民国家の規模にまで肥大化した「私的領域」の支配をもたらすだろう。本書は、全体主義の現実的基盤となった大衆社会の思想的系譜を明らかにしようとした、アレントの主著のひとつである。

#### 関連書籍・映画



### 『責任と判断』ちくま学芸文庫、2016年。

「歯車理論」や「小物理論」の虚偽を突き、第三帝国下の殺戮における個人の責任を問う「独裁体制のもとでの個人の責任」、アウシュヴィッツ後の倫理を検討し、その道徳論を詳らかにする講義録「道徳のいくつかの問題」など、ハンナ・アレント後期の未刊行論文集。ユダヤ人である自らの体験を通して全体主義を分析し、20世紀の道徳思想の伝統がいかに破壊されたかをたどる。一方、人間の責任の意味と判断の能力について考察し、考える能力の喪失により生まれる“凡庸な悪”を明らかにする。判断の基準が失われた現代こそ、アレントを読むときだ。



### 『革命について』ちくま学芸文庫、1995年。

本書でアレントは、主としてアメリカ独立革命とフランス革命の経験を比較・考察し、自由が姿を現わすことのできる公的空間を保障する政治体の創設として前者を評価する。政党制や代表制ではなく、ある社会の全成員が公的問題の参加者となるような新しい統治形態がその時そこで始められたのである。忘れられた革命の最良の精神を20世紀政治の惨状から救い出す反時代的考察。



### 映画『ハンナ・アレント』2014年。

彼女は世界に真実を伝えた—  
かの有名なナチスの戦犯アドルフ・アイヒマンの裁判を傍聴し、独自のレポートを世に発表、  
大スキャンダルを巻き起こしたユダヤ人女性哲学者、ハンナ・アレント。  
その生きざまと現代にも通じるメッセージを、魂を揺さぶる重厚なるドラマとして描ききった傑作。

案内文はすべて amazon より